

親愛なる卒業生諸君。諸君は六年乃至三年間の螢雪の功を積んで今日唯今、本学園を巢立たんとしております。

学に志して本学園への受験勉強を始めた時から起算しますと七年乃至八年に亘る長い努力の結果であります。時間だけをとりましても人生の十分の一に当る長い期間であります。その意義からすれば此の期間は人間形成の決定的時期でありまして他の如何なる時とも較べる事はできません。此の重大なる時期の総決算としての本日の此の卒業式を健康にして恙なく迎えられました事は定めし感慨に堪えないものがあろうと存じます。誠におめでとうございます。

此の長い間、毎日一喜一憂しながらひたすらに諸君の成業を待ち焦がれなさいました御父母様・御近親の皆様のお歎びは如何ばかりであろうと存じます。心よりおよろこび申上げます。

諸君。われわれは諸君をお迎えするのに日本精神界のプリンスをお迎えするのだと考えました。この貴公子に、学に志す姿勢を教え学問の手解きをし更に聖トマスの知性と愛の一端を伝えて、愛と光の使徒となる基礎をお与えする事を他の如何なる仕事にも勝る聖業と心得て愛光の教師たることに少ならぬ感激を覚えたのであります。我々にとりましても本日の卒業式は又感慨に堪えないものがあります。欠点多く怠りがちでさえあつた我々の指導によく服して諸君が学問への精進と徳性の練磨に心を碎き、若いながらに愛媛県の教育界に愛と光の灯を点し、いさか新風を吹込んでくれたとの自負を禁ずることができません。此の機会に改めて感激と敬意を払いたいと存じます。

尚、高い所から失礼ではございますが親御の皆様にも深く御礼申しあげます。やや異状とも見える学園の教育方針をよく御諒解下さいまして常に暖かい御声援を下さいました事を誠に有難く存じております。物質面でも不十分な学校施設をよく御辛棒下さり、校舎の増築や設備の改善に対しましても常に御援助を惜しまれず、又度重

なる授業料などの増徴にも快く御協力くださいまして誠に有難うございました。学園が今まで順調に歩み続けることの出来たのは偏々に御父母の皆様方の温かい御支援の賜でありまして、此の御温情は長く忘れる事が出来ません。

さて親愛なる卒業生諸君。此の期に及んで今更何を諸君に語る必要がありましょうか。その上諸君は全員大学に進んで更に学業を続ける幸運に恵まれた人ばかりであります。大学と本学園では学問の次元が異り本学園では棹のあやつり方を学んだに過ぎませんが、大学では愈々学問の本流に棹することに成るのであります。しかし学問に志す精神、人として守るべき操については本学園の場合といさかも異なるものではありますまい。

本学園に於て十分の成果を挙げてくれました諸君が大学に於ても愛と光の使徒として、大学の精神に相当の寄与をしてくれるであろうと期待するのであります。

子しかしながら諸君。諸君のこれから入学しようとせらるる大学の状況は誠に騒然たるものがあり（昨日のラジオ放送では、国立四十七校・公立六校・私立十八校計七十一校、封鎖二十六校）何となく革命前夜を思わしめる感があります。諸君の親御も定めし御心配の事であろうとお察し致します。問題の解明・解決に至る道は勿論一高等学校教師の論すべきことではなく大学当局・中央政府・否國家の英知を集めて慎重に審理るべき問題であります。然し諸君にとっては今日唯今の問題でありまして慎重処理などという扱い方には不満であります。しかし御両親にとっても焦眉の深い御心配であります。僭越の誹りを免れないかも知れませんが去る十二日の読売新聞に載せられた本多顕彰氏のアンケートに対する答は大部分国民の共感を呼ぶ感想ではないかと思ひますし又私共の素朴な感想であります。

「大学に学ぶ学生は同年配の青年が既に社会のために働いてくれている事を思い、自分の幸運に感激しつつ、

「私がこの問題に付いて一々専門的な知識をもつてゐるわけではない。」しかし又本邦の場合はお憲法うるさめのキセ。

私も大學生の問題があまり記憶に残っていないが、たゞ一つは、もつた積弊ならば、一挙の解決などある説がありますまい。時勢の変化によって生じた社会と大学の間のギャップであるとしましても、英知を集め時間をかけて一步一步解決さるべき問題でありまして、頗るアスピリンで一度に熱をさますと言う説には参りますまい。

は異常でありますので、そのような静かな思慮や反省を押し流してしまうのではないかと恐れるのであります。その間に処して大過なく大学生活を送るには、如何なる心の持ち方であるべきでありますか。

私は此處で我が松山の誇りである安倍能成先生の、終戦当時の輝かしい事績を諸君に御紹介したいと思います

ますが、大意を述べますと、第一。心構えとして我々は立派な敗戦国民として行動する積りだから、そちらも立派な戦勝国民として行動してくれと言うこと。次に政策の面では、①日本の学問の発達を妨げないようにしてほしい事。②日本固有の美点を尊重して西欧の偏狭なものを押しつけない事。③米本国でさえ実行していないような新奇な学説を日本をモルモットとして強行しない事。の三点であります。一部分を朗読します。

敗戦當時、日本には二つの大きな心配がありました。一つは、占領軍は日本を生かしてはおくが、再び強国たり得ないよう厳重に圧力を加えるのではないかという事。二つには、日本は外国の思想謀略に禍いされて内部的に弱体化し自滅してしまうのではないかと云う事。

第二の心配については、終戦当时之を本気に考えた人は少く之を口にする人は殆んどありませんでしたが、ある私の親しい外国人は日本は思想戦にはいわば処女地であり免疫性を持っていないから、今後一番長く苦しむのは此の点ではないかと指摘してくれました。現状は何となくそのような心配が表面化しつつあるのではないかと、いう気がします。

さて第一の占領政策でありますと、日本弱体化政策は到る所に見出されました。しかし幸いにもこの弱体化の為の外部圧力は以外にも早く終息しました。戦勝国としては珍しい程の米国の寛大さと理想主義が一つの原因であります。最も有力な原因は共産圏の勢力が意外に強大であり、之に対抗する力として日本を利用する必要が生じたからであります。昭和二十三年には北朝鮮に共産国が成立し、二十四年には中国に共産革命が成功し、二十五年には朝鮮に南北戦争が勃発するなど、共産圏の実力が並々ならぬ事が実例を以て示されました。しかしながら

この様な緩和は二十四年以後の事でありまして、占領後の二十一年頃は弱体化政策がやっと始まろうとしていた時であります。（小中学校に対する修身や日本地理・日本史の課目の廃止命令。研究機関としても物理学研究のメッカであった仁科研究所の閉鎖や各種の研究の停止命令、研究施設や文献の没収が相繼ぎました）此の様な暗たんなる状勢の内に教育視察団一行は到着したのであります。安倍先生のご挨拶の意義はそのような背景を外にしては理解する事が出来ません。その当時、占領軍の命令や意向に楯つぶが如きことは思いもよらぬ事であります。『敗戦国民たる我々が卑屈にならぬと共に戦勝国たる貴國民が無用に驕傲ならざることから少し緩和してくれと頼むのが関の山であります』と米国の意に逆うとか米国の態度を批判するなどということはもつての外の事と思われていました。中には自己の栄達の為にアメリカに迎合するような軽薄な者さえ少くなかつたのであります。『敗戦国民たる我々が卑屈にならぬと共に戦勝国たる貴國民が無用に驕傲ならざることを信する』と言うような思い切った表現をする勇気は何處にも見当らなかつたのであります。當時文部省で局長をしていました私の知人は、この日の安倍先生の挨拶で日頃うつ積していいた溜飲が一時に下がる思いがしたと感慨を込めて語ってくれました。これは独り文部省勤め人のみでなく政府各界の人の共通の感懐でありましたろうし伝え聞いた日本人全体の思いでもあつたと思います。

安倍先生の文相御就任は昭和二十一年の一月であります。五月に幣原内閣が総辞職しますと、ご自分もささと下野されましたので文相ご在任は僅か百日に過ぎませんでした。しかし安倍先生はこのご挨拶の為に一躍時代の脚光を浴びられ一世を風靡する花形的存在となられました。下野直後、旧憲法による勅選の貴族院議員になりましたが、折から新憲法草案が衆議院を通過して貴族院にまわされた時であります。先生は忽ちこの憲法改正委員会の委員長になられ、続いて皇太子殿下の教育参与・帝室博物館長・学習院々長・日本の将来を決すべ

き教育刷新委員会の委員長というような重要な役職を次々にお受けになり、それを先々立派に成し遂げられたのであります。昭和二十二年、学習院が帝室からの保護を断たれて一私学校になりますや、他の役職を辞して専心、廃虚に化した学習院の再建に邁進され、その計画の一応成就した後、一昨年に亡くなられたのであります。安倍先生のあの魅力の正体は何でありますか。戦勝国たる米国に対して対等の態度で臨まれた勇氣のためであります。しかし若し勇気と正直のみでありますたら果して人は安倍先生にあのように心酔しあの様に重要な任務をお任せすることが出来たでありますか。私はそれに加えて更に先生の深い教養をあげなければならぬまいと思います。ギリシアの古典と西欧の哲学思想、日本並びに東洋の古典に対する長年の沈潜、これによって得られた深い教養の裏づけ。これがあつたればこそ、その把握はものの本質に触れ人の心にも訴えることが出来たのだと思います。安倍先生の魅力の正体は、教養と正直と勇気の三者の結合であろうと思います。勇気・正直・教養。この三つともそれぞれ貴重なものであります。その一つを体得する事それ自身既に大変な事であります。が、しかしその一つを備えた人を探すことは格別難かしい事ではありますまい。然しその三者を同時に兼ね備えるという事は至難中の至難であり、さればこそ非常時に一大偉力を發揮することが出来て世の師表として仰がれたのであります。戦後われわれは三人の偉大な指導者をもつたと思います。政界に於ける吉田茂氏、学界・思想界に於ける小泉信三氏と安倍先生。そしてその御三方の魅力の正体が共にこの教養と正直と勇気の三者の結合であることも奇しき一致と申すべきであります。

安倍先生の教養に対する深い御用意を物語る話があります。昭和十一・二年の頃だったと思います。その当時

先生は京城帝大におられましたがたまたま松山へ立寄られましたので今の松山商大その当時の松山高商でご講演をお願い致しました。

その頃文部省は、日本思想高揚の目的をもつて多くの大学の先生などに依頼して日本思想であるとか日本文化であるとかの特質といったようなものを百頁内外の小冊子の形で書いてもらい、それを毎月五冊とか十冊とか学校へ無償で送って来ていました。中には頂きかねるものも相当にあり思想問題に素人の私などは読むだけでも大変であり去就に迷つておつたのであります。丁度よい機会でありましたので安倍先生にお尋ねしてみました。日本思想史とか日本文化の特質とか、その長所短所などを書いた本格的な本はありますまいかと。それに答えるようない意味で先生は一時間半ばかり学生に講演して下さいましたが、私は深い尊敬の念をもつて承った記憶があります。先生は「今、世の中に日本文化論が横行しているが、これは心無い話である。日本文化の研究はやっと緒についたのみであって、これを口にし筆にするには少くも半世紀、四五十年の地味な研究が必要である」「知らざるを知らざるとなせ。これ知るなり」という論語の章句やプラトンのソクラテスの弁明などを例に引かれ、潮流に乗つてちょっととした思いつきを一二の古典を頼りに巧者にこなす一部の学者の態度を鼻持ちならぬという風にお話しになりました。

安倍先生の最も華々しい活動期は終戦後、文部大臣になられてからでありますから御齢六十二才以後の二十年間という事になります。この事を諸君に心に留めて頂きたいと思います。記憶力絶倫の先生が十六七才の高等学校の学生時代から約半世紀、倦まず絶ゆまず蓄積されました深い教養がはしなくも敗戦非常時という時に日本の社会と国家のお役に立つたのであります。此の深い教養の裏づけなくして先生の名声もなければ社会への貢献もあり得ないと思います。そして社会が大学人に期待しますのも一に此の点にあると思います。

諸君。大学の現状は誠に憂慮すべきものがあります。しかし大学人の使命に思いをひそめ、深い知性と高い徳性を体得し、愛と光の使徒として社会の期待に立派に応えて下さる事を願つてやみません。